

特集：入学

世界に向かって飛び出そう

中谷 敬（筑波大学 生命環境系）

最近マスコミなどでよく耳にすることばに「グローバル化」があります。企業が英語を公用語化したり、外国人を多く採用したりといったニュースが聞こえてきます。その一方で、最近の若者は内向き志向で外国に出たがらないというニュースがあります。文部科学省の統計によると2009年に海外留学した日本人はピークの2004年に比べて28%も減少したとありました。確かに海外に出る若者が減っているのは事実のようです。それを若者のせいにするのは大人の身勝手、今の大人が作り出した経済状況や社会システムがそうさせたとも言えます。それでも私は皆さんが海外に行くことを大いにお勧めします。その理由は何かって？ もちろんさまざまな理由があって、いろんな人がいろんなこと（ありきたりなこと）を言っているのだから、それについては書きません。では、自分の経験から、お勧めする最大の理由は何かということ、それは「楽しいから！」です。今回はこの一点に絞って書きます。

私のこれまでの人生の中で、生活の拠点とした街はつくば市で6番目です。6か所のうちの2か所は海外で過ごしました。いずれもアメリカの都市です。初めてアメリカに行った時は、習慣や文化の違いに戸惑うことも多々ありました。生活を始めるにあたって必要な銀行口座の開設や運転免許証の取得などは、social security number (SSN)を持っていないと何もできません。ですからアメリカに着いて最初の仕事はsocial security officeに行くことでした。アメリカ生活のありとあらゆる場面でSSNを使っていたので、自分の携帯電話番号は言えなくてもSSNは今でもすらすらと行うことができます。もう一つ、行ってみて分かった習慣の違いがあります。今でこそ買い物にはどこでもクレジットカードが使えますが、当時は日本では現金、アメリカではパーソナルチェックが主流でした。チェックとは日本語で小切手です。日本的感覚では、小切手なんて大金を支払う時に使うもので自分には関係がないと思っていました。でも、アメリカではスーパーマーケットでも、電気料金の支払いにも、友人に支払う時でさえチェックを使っていました。もちろん給料もチェックでもらっていたので、給料日の翌日は銀行に行くのが習慣でした（ちなみに銀行にはドライブスルーがあります）。なんてめんどくさいのだろうって？ いえいえ、こんな経験はなかなかできるものではありません。わくわくしませんか？

よくアメリカは食べ物がおいしくないと言います。確かにアメリカの食べ物はまずい・・・、と初めのころは思っていました。しかし、中国人が集まるChinese restaurantでは極上の中華料理が味わえることを発見しました。特に中国人と一緒にいくと、中国語の裏メニューがあって英語のメニューにはない料理が出てきます。Blood pudding（血で作ったプディングの料理）やchicken feet（文字通りチキンの足の先端部分だけの料理）など・・・。また、ギリシャ人が集まるGreek restaurantで食べ

たフェタチーズのサラダやウーズ(ούζο)も忘れられません。Texas Renaissance Festivalの屋台で食べた巨大なターキーレグ、フロリダの道路脇で売っていた5個1ドルのグレープフルーツ、メイン州で食べたただ茹でただけの獲れたてロブスター、どれも三ツ星レストランでは味わえない絶品です。食文化ひとつとっても、その多様性を享受するには外に出ることが重要です。海外に住んで最も楽しいことは、世界中の人と友達になれることです。日本人同士で会話をすると、意見が食い違っても根本的なところで考えが似通っていることがあります。しかし、出身国が違うと考え方や価値観が実に多様で、話を聞いて「そういう考えもあるのか」と「目から鱗」の状況が何度もありました。広東語しか話せない中国人と北京語しか話せない中国人は言葉が通じないことも、友達ができて初めて知ったことです（2人は英語で会話していました）。他にも、Soka Gakkai（創価学会）を信仰する白人のアメリカ人、文化大革命の最中にピアノばかり弾いていたという中国人、カリフォルニアで自分のワイナリーを持つのが夢だというイタリア人医師。想像するだけでも楽しくなりませんか？

まだまだ面白い経験がたくさんありますが、きりがないので、最後に少しいただけアカデミックな世界の話をしてみたいと思います。私の10年間のアメリカ生活のうち、後半の6年間を東海岸 Baltimore の Johns Hopkins University で過ごしました。Department of Neuroscience という部署にいたのですが、そこでもいろんな驚きがありました。まず、研究者の層の厚さは日本の大学と比較になりません。Neuroscience というテーマのもとに、さまざまな領域のさまざまな技術を持った優秀な研究者（ノーベル賞受賞者も含めて）が集まっていました。ですから、こんなことが聞きたい、あんなことがしたい、と思ったら階段を上がって相談に行けば良いのです。生理学分野の研究にはオリジナルな実験装置が必要ですが、同じフロアに machine shop があって、装置のアイデアだけ伝えれば一流の machinist がすぐに装置を作ってくれました。実験室も広い、lab technician などの supporting staff も多い、とても恵まれた研究環境でした。アメリカ滞在中に5編の論文を nature に発表することができましたが、それもこのような環境があつてこそ達成できたのだと思っています。新入生の皆さんの中にも将来研究者を目指している方がおられると思いますが、海外に目を向けると多くの可能性が皆さんを待っているのです。

私が学生の頃は在学中に留学する制度などありませんでした。しかし、皆さんにはマンチェスター大学を始め、多くの留学の機会が用意されています。これを逃すのは実にもったいない。ぜひ一度海外に出てみましょう！